

# 「釣り忍」

松田 實(Mignon M. Mazda)

## 第一話 「江戸麴町」

明治維新が迫った安政五年八月末、江戸の麴町に住む河瀬平四郎と文絵夫婦に待望の長男が出生した。もともと平四郎は、旗本である伊藤光吉の次男だったが、小普請組の河瀬謙次郎の婿養子に入っていた。

河瀬家は、徳川幕府二代将軍徳川秀忠に慶長年間から仕えた譜代直参の家柄であり、河瀬本家からは老中田沼意次の元で勘定奉行を勤めた河瀬兵庫頭を輩出していた。この兵庫頭の頃、御家人株を買って分家したのが文絵の祖父で、江戸城の天守下番を勤めた河瀬光政である。

ところが、文絵の父親である謙次郎は、突如病気に倒れ御役御免を願い出て、小普請組所属の無役となった。直参の身分とはいえ微禄の者は、何かの役目に就いてないと家計は火の車どころの騒ぎではなくなる。そこで河瀬家は、甲府勤番方江戸詰の実力者であった伊藤家と親戚となることで、少しでも事態を改善しようとした訳である。

河瀬平四郎の屋敷は、本家にあたる河瀬駿河守の屋敷に近い両国にあったのだが、平四郎夫婦は麴町貝坂にある伊藤家の屋敷内にある侍長屋で暮らしていた。平四郎の就職活動にあたり、伊藤家と頻繁に行き来する必要があるからである。

文久二年十二月、平四郎は養父の家督を相続した。三十俵二人扶持の軽輩とはいえ、晴れて直参の身分となった彼に、新たな世界が開けたのだ。人生という旅路の風は何処へ向かうのだろうか。

## 第二話 「甲州市川」

実家の伊藤光吉と、同じ伊藤一族の伊藤金之助家へ婿に行った叔父平八郎の助力もあって、平四郎が家督を継いだ翌年の文久三年八月、小普請支配から平四郎に「甲州市川陣屋代官手附仰付」の沙汰が下った。これは甲州にある幕府の直轄領地を管理する代官所の職員への任命ということだ。

平四郎夫婦は、初めての御役、それも甲州市川という見知らぬ土地での生活をせねばならぬこととなった訳である。とはいえ、当時平四郎の父光吉が甲府勤番方に出仕しており、しばしば甲府と江戸を行き来していたので、そんなに心細い訳では無かった。

引越し支度といっても、当時のことであるから大袈裟なことでもないが、早々に荷物を纏めた平四郎夫婦は五歳になった息子の徳太郎を連れて、現在の山梨県市川三郷町にあった市川陣屋を目指して旅立った。

この甲州街道を西へたどる旅が、その後に続く長く険しい旅路の始まりだとは、将来への期待と不安に満ちていた平四郎一家のみならず、他の誰にも想像すら出来なかつただろう。既に幕末、新しい時代へ向けて世の中の風は激動していた。

### 第三話 「江戸の空」

慶応二年四月末、三度の冬を甲州で過ごした平四郎に、藪益二郎組小普請役への沙汰が出た。甲州での生活にもようやく慣れ、その間に代官職を勤めた中村勘兵衛や安藤伝蔵とも協力してうまく職務を果たした平四郎であったが、幕末期の政情不安の元では、これ以上市川陣屋で勤務することはできないと判断したのである。

代官所の役人といえば、年貢の容赦ない取り立てや無理難題を押しつけることによって、領民を苦しめる存在というイメージが強いが、実際には領内を歩き回ってその実状を江戸表に報告する、いわば地方代表の側面をも併せ持つ仕事でもあるから、真面目にきちんと勤務していれば、おのずと領民の尊敬は集まるものだ。平四郎もその例外ではなかった。

小普請職に戻れば家計が困窮することは明らかだが、この数年蓄えたものもあり、ひとまず安全な江戸へ戻って河瀬家や伊藤家の親戚と相談することで文絵にも納得させ、甲州市川を引き上げることにした。当時の江戸では、長州征伐に伴う政情不安と米価を中心とする物価高騰で、芝や赤坂でも商家の打ち壊しがあったぐらいだが、それでも江戸の方が安心できると平四郎は考えたのだ。

この帰還を伝え聞いた陣屋の手代・小者のみならず、甲州暮らしの間に知己となった庄屋衆や町商人たちも平四郎との別離を惜しみ、いろいろと世話をしてくれたので、江戸への旅支度は比較的楽であった。そして折からの梅雨空の下、平四郎夫婦は三年前に辿った甲州街道を、一路江戸へと向かった。

今回の旅で一番大きく変わったのは、市川で生まれた娘の佐和が一緒ということだ。文絵は、江戸の親戚達に佐和の顔を見せるのが楽しみだった。平四郎一家は、甲州との国境である小仏峠を既に越え、江戸の空がすぐ目前にあった。

#### 第四話 「帰農」

江戸へ戻ってきた平四郎は、義父の河瀬謙次郎の名前から一文字もらって謙四郎と改名した。もう一度小普請の身分から幕府の役目に付くための就職活動をするにあたって、心機一転を図ったのである。前任地の甲州勤番支配からの推薦もあって、慶応三年四月、謙四郎には吹上御苑御屋敷方役という仕事を与えられた。

ところが、その一年半後の慶応四年九月八日、時代は明治となった。征夷大將軍の徳川氏は、現在の静岡県の一部にあたる駿河国へと移動させられ、それに従って多くの直参旗本や御家人が駿河へ移住することになったのは、歴史の教える通りである。江戸での生活も落ち着いたかに思えた謙四郎一家に、明治維新の嵐が押し寄せてきた。

幕閣重役ならいざ知らず、軽輩の身に対しては、駿河移住後の家禄も保証されないという条件ではあったが、親戚とも相談したうえ、謙四郎一家も駿河へ移ることにした。

河瀬家も伊藤家も、徳川家康・秀忠以来の直参というプライドの結果でもあるが、誕生間もない明治政府管理下の江戸に不安を持ったことが大きかった。謙四郎は駿河移住にあわせて、長男の徳太郎に米太郎と名を改めさせた。謙四郎は、旗本八万騎の多くとともに帰農して武士から百姓になる覚悟を彼にも固めさせたのだ。

徳川家が幕臣移住のために準備した船が品川沖を離れるとき、米太郎や佐和は初めて乗る蒸気船に少しはしゃいでいた。謙四郎と文絵には駿河へ移住してからの生活が全く見えなかったが、甲州市川で見聞した経験を頼りに前へ進むより他にないと考えていた。江戸の景色は多分これで見納めだろうなと謙四郎は思った。見あげると江戸の空に雲が低く垂れ込めていた。

## 第五話 「野望」

駿河田中、現在の藤枝へ来てから三年目の明治四年、普段から慣れない百姓生活で過労気味だった謙四郎が突然倒れた。田舎暮らしにも少しずつ慣れて来ていた矢先の出来事で、一家はただただ呆然とするだけであつた。河瀬一家と同様に移住してきた駿河田中奉行所に所属していた旧幕臣の人々と、地元藤枝の世話役がよく面倒を見てくれたので、どうにか彼を近隣の寺に葬ることができた。

謙四郎亡き後、まだ十三歳で家督を相続した米太郎に、文絵は東京へ戻ると云つた。東京には明治政府に仕えた伊藤家が残っていたので手紙で相談したところ、面倒を見てくれるとの返事があつたのだ。それを聞いた米太郎は直ちに賛成した。田舎と江戸の両方を知っている米太郎は、あまり百姓仕事が好きではなかったせいもあり、これから河瀬家は自分が担って行かねばならぬが、当時の藤枝には自分のための将来がないと考えたのだ。

その翌日からまた旅支度が始まつた。米太郎は一家の主人として、家産の始末、役所への届出など、いろいろなことを処理せねばならなかつた。文絵の手を借りながらとはいえ、十三歳の身には手に余ることも多かつたが、ある時ふと、甲州市川への移動のときも両親はさぞ大変だつたのだなと思ひ当たつた。

東京だけでなく、日本の国全体が新たな方向への歩みを始めていた。東京帰還の旅は、米太郎自身の旅の始まりとなつた。母と妹を伴つて、東海道を東へと進む米太郎の前に、青春の野望を示すような入道雲があつた。

## 第六話 「急逝」

明治二十七年六月、三十七歳になった米太郎にとって、驚天動地の事態が起きた。長男の主税(ちから)が事故で急逝したのだ。主税は学業成績が優秀で、当時でいう最エリートコースである東京府立第一中学にその年合格し、将来を嘱望されていた矢先の出来事だった。自分自身が十三歳で家督を継いだ経験のある米太郎は、まだ中学生だった主税に、当時戸主権と呼ばれた家督を譲っていたのだ。

藤枝から東京へ戻ってきた米太郎は、一家の主として必死に働いていたが、身分を問わず優秀な人間を育成し重用するという明治政府の方針に従い、子供達に立派な教育を身につけさせようとしていた。米太郎自身も武家の育ちであるから、子供達の将来につながる教育の重要性は身にしみて知っていた。

米太郎と妻の理恵との間に生まれ、残念ながら早死にした子供たちは、父平四郎の実家である伊藤家の縁を頼って、新宿の大宗寺に葬っていた。学才のあった主税の急逝を残念に思った米太郎は、お寺に願って「学遵」の法名を貰うことにした。まだ夏の初めであり、風が冷たかった。

## 第七話 「夏風邪」

明治三十七年、米太郎は四十六歳の壮年に差し掛かっていた。この年の春、世話をしてくれる人があって、米太郎は仕事を変え、住居も下谷入谷町から浅草元吉町に変わった。今度の仕事は以前よりも収入が良く、家族に少し楽をさせてやれると米太郎は考えていた。

七月四日、米太郎とともに苦勞をともにして来た妹の佐和が、夏風邪で寝込んで間もなく、四十歳で逝った。佐和は、一家が経済的に大変困窮していた時代に婚期を過ぎしてしまい、そのまま家にいた。少し内気な性格だったが、妻の理恵との仲も良く、子供達に対しても良き叔母であった。佐和にはもう少し楽をさせてやりたかったと、米太郎には悔やみ切れぬ思いが残った。

佐和の供養をしている時、早世した主税も一緒なのだから寂しくは無かろうと自分を慰めていることに米太郎は気付いた。もう日露戦争が始まっており、世の中を騒々しい風が吹いていた。

## 第八話 「釣り忍」

明治四十一年年六月十日、折からの雨模様の空の下、浅草元吉町にある河瀬家はひっそりとしていた。米太郎の母である文絵が危篤状態に陥っていたのである。軒下で釣り忍が静かに揺れ、文絵自身も含め、家族の皆が彼女の天寿を知っていた。

文絵は米太郎に、お守り袋の中に一握の土があり、それは父謙四郎の墓の土であるから、どうか一緒に葬ってくれと頼んだ。もちろん米太郎に異論があろうはずはなかったが、できることなら今すぐにでも静岡藤枝へ飛んで行き、父の遺骨を引き取って来てやりたかった。

数日後、文絵は謙四郎の形見とともに大宗寺へ入った。大宗寺までの途中、四谷あたりでかつて両親と暮らしていた麴町の方角を振り返った米太郎は、甲州市川への出役で始まった両親の旅は、これですべて終わったのだ、本当に長い旅路だったのだなと思った。西空に、ひとひらの茜雲が浮かんでいた。

## 第九話 「一家離散」

日本が国際連盟を脱退し、国際社会から孤立しつつあった昭和八年、米太郎にとって最後の別離があった。この年の二月十五日に跡継ぎの泰三が、続く五月十六日には泰三の妻の美緒が相次いで急逝したのだ。既に米太郎は七十五歳となり、人生経験とともに多くの別離を経験していたが、さすがにこの別離は心身ともにこたえた。

やや病弱な身ながら学校教師として勤めていた泰三に家督を譲って隠居したのは、米太郎が七十三歳になってからのことだった。この家督相続は遅すぎると米太郎自身も思っていたのだが、主税の急逝という経験が、必要以上に彼を用心深くしてしまったのだ。

泰三は二人の息子を残していった。とはいえ、残念ながら米太郎には、彼の手元に残された孫たちを育てるだけの力が残っていなかった。結局、真弓家へ嫁いだ娘の初音と、美緒の実家である小野家にそれぞれを預け、将来を託すことになった。

それから八年後の昭和十六年、孫たちの幸せを祈りつつ、米太郎は八十三歳の天寿を全うして歴史から退場することになる。数奇な運命と太平洋戦争の嵐が、晩年の米太郎たちを一家離散へと吹き飛ばしていった。

(了)

※ この小説はフィクションです。